

第三章 公園の魅力向上要件の留意事項

第一章では、海外事例調査結果をもとに、公園緑地の魅力向上のために必要な7つの要件の抽出と、その要件を構成する魅力要素の整理を行い、第二章では、国内事例調査結果をもとに、魅力要素を追加し、要件の内容の補強を行った。第三章では、第一章と第二章を受けて、各公園の事例から要件毎の留意事項を整理し、以下に記す。

要件1 都市における公園の明確な位置づけ

本要件は、公園緑地というものは、単体としての公園内容の価値のみならず、都市の中における当該公園の存在意義、すなわち位置づけが明確なものほど魅力が大きいことを示している。もう少しかみ砕いて表現すると、公園の魅力を向上させるためには、当該場所になぜに公園が設置されているかという理由（意味）、もしくは設置されなければならなかった意義が正しく踏まえられているかということが重要であるということの意味している。さらに言い換えれば、公園が設置された背景を正しく踏まえて、適切なテーマを見出せているかということでもある。

それは、海外事例のケースを見ると特に分かりやすい。例えば、セントラルパークは都市のスプロール化という社会問題に対応するため、都市の中央に広大な自然地を設けるという明確な目標が定められ、この目標に沿って人工的に広場や樹林、池が設けられ、その後は、セントラルパークに寄り添うように良好な市街地が形成されていき、今では、セントラルパークはマンハッタン島に不可欠な存在になっている。また、ミレニアムパークは、シカゴの中心地に残った遊休地を活用するために、都市のシンボルとしての公園を、アートをテーマに整備するという市長の明確な目標が立てられ、それに沿って一流の芸術家や建築家によるパビリオンが多数整備されていた。今では、まさにシカゴ市の顔であり、観光客はまず本公園を目指してくるほどになっている。ハイラインについては、廃線高架だった鉄道敷（ハイライン）を残したいという目標が一市民から提起され、地道な市民活動によってその保全が決まり、さらにどのように保全活用するかを多くの賛同者によって検討され、緑豊かな遊歩道公園が出来上がり、その周辺市街地は公園に合わせて用途や高さが制限されていった。今では、ハイライン沿線の市街地はニューヨークの中でも人気の観光地となり、多くの人々に利用されている。これらの成功事例に共通することは、どれも公園設置の明確な目的を有していることである。都市の中で公園に求められている機能を的確に反映したテーマを掲げ、その理念に忠実に則った公園の整備がなされている。

一般に新たに公園を計画する際には、たいいていテーマが設定される。もちろん、公園のニーズが把握され、それに沿ったものが設定されるが、街区公園のように面積の狭い公園の場合、類似の公園と似通ったテーマが設定されることが多い。また、広域公園のように大面積のもので多様

な施設が設けられるような公園では、総花的なテーマが設定されることが多い。そうしたケースは、セントラルパークなどの事例のように、明確な目標や都市的な必要性が希薄なためであろう。しかしながら、少なくとも観光に資するような公園整備を図るならば、本来はその公園に特化したテーマが設定されるべきである。つまり、公園の目的や意義の理解がどこまで深められているかが、公園の魅力向上に不可欠だと言えよう。

また、もしもすでに供用されている公園で、今後観光客を呼び込もうとするならば、今ある公園のテーマを振りかえってみることも必要である。そのテーマが本当に公園に合致しているかを検証し、必要ならばテーマの見直しも必要であろう。

要件2 設置目的に合致したデザインコンセプト

要件1の「都市における公園の明確な位置づけ」は、公園の基本的な設置目的や方針にあたるが、それを実現するためには、こうした公園の設置目的に合致した適切な公園計画や公園全体のデザインコンセプトを立案することが重要である。ちなみに、ここで言う公園全体のデザインコンセプトとは、個別の公園施設のデザインコンセプトではなく、公園全体に一貫して適用すべきデザイン方針の共通事項を意味する。

セントラルパークの事例では、都市のスプロール化防止のために、市街地の中央に広大な自然地を設けるという目標が立てられた。この目標に沿って、園内に設けられたのは広大な池と芝生広場や牧草地、樹林、庭園などである。ベルヴェデーレ城やベセスタ・テラスなどの建築物も設けられてはいるものの、どれも公園全体からすれば規模は小さいものである。しかも、設けられた自然地は人工のものであるにも関わらず、池の汀線は自然の形態に似せて造られるなどの配慮がなされている。これが、もしも公園全体がディズニーランドのような遊園地のデザインになっていたならば、はたしてスプロール化防止の目的がどこまで達成されたかは疑問である。

また、ハイラインでは、そのデザインの選定についてはコンペが実施されたが、提案された案の中には、ジェットコースターを整備する案や樹木が1本も無い案もあったようである。数ある提案の中から、審査会が最終的に採用したのは、マンハッタンの摩天楼を山にたとえ、その山々のふもとに横たわる谷をイメージしたデザインであった。そのデザインは、市民がハイラインに抱くイメージそのものであり、そのデザインでなければハイラインを保全する意味が無いと判断されたからである。このように、セントラルパークやハイラインの事例を見ると、たとえ、公園の設置目的やテーマが明確であっても、その目的にそぐわないデザインコンセプトが立てられていては元も子もないことが分かる。公園の魅力向上のためには、いかに公園の設置目的やテーマを実現するかが大事であり、そのために公園計画における基本コンセプトやデザインコンセプトを正しく、かつ明確に立てなければならない。さらに他の事例を挙げると、例えば、スタンレーパークの場合は、都市に残った貴重な原生自然の保全が基本テーマであり、そのために自然に影響の少ない遊歩道（シーウォール）がメインの施設になるなど、極力原生自然を保全するデザインコンセプトが採られている。また、広島平和記念公園は、原爆被災地の記憶の継承と犠牲者の追悼がテーマであり、その目的のために、公園は静謐な空間の現出というデザインコンセプトが求められた。まさに、こうした公園の設置目的を実現するための正しいデザインコンセプトの立案が本要件の意味である。

ところで、広域公園や総合公園などで、洋風の公園の中に日本庭園があるなど、個別のゾーンや施設ごとにデザインが異なる場合がある。本要件でいう公園のデザインコンセプトとは、そうした個別の施設のデザインの違いを排除するものではない。本要件で指すデザインコンセプトとは、異なるゾーンの個別の施設デザインにも共通して普遍的に踏まえるべきコンセプトを指すものである。

なお、要件1と要件2は本来は一体不可分であり、順を追って要件を踏まえていくことが理想的である。しかしながら、実際には、公園を取り巻く環境の変化、例えば、周辺住民の高齢化に伴って公園へのニーズが変わってしまったとか、人気の公園施設の社会的陳腐化によって利用度が著しく低下するなどのことは十分にありうることであり、こうした状況では要件2のみの修正という対応が考えられる。

第一章で挙げた海外公園事例は、いずれも要件1と要件2がはっきりしているが、国内事例の中には、要件1と要件2の関係が変化した事例が見受けられる。例えば、警固公園は、もともとは駅前でかつ商業施設や行政施設に囲まれているといった立地条件のため、待ち合わせ等に利用される賑わいある公園であったが、公園の老朽化に伴って治安悪化が社会問題化したため、治安改善のためのリニューアルが、本公園再生のためのデザインコンセプトとなった。しかし、それは本来の公園のテーマや課題ではなく、長年の公園の歴史の中で、公園の施設状況や周辺市街地の状況の変化の中で現れた課題解決のためのものであった。本ケースは、要件1とは直接には関係のない要件2であっても、それが公園の利用増進に繋がる場合があるという稀有な事例と言える。こういうケースでは、当該公園にタイムリーに求められているニーズや課題に応じて公園のデザインコンセプトを見出していく必要がある。

要件3 公園施設デザイン（施設内容含む）

海外事例や国内事例からは、理念やテーマを踏まえた公園デザインコンセプトに基づいて、それぞれの公園の特性を活かしたデザインが様々に検討されていることが分かる。例えば、セントラルパークでは、人工的に整備する池については、できるだけ自然の風景となるように汀線護岸のデザインに配慮がなされている。また、ハイラインでは、通常の公園仕様で妥協しない、詳細なデザインへのこだわり（手すりの高さやベンチの仕様など）が見られた。利用者や観光客が公園を利用する場合に、直接目にして触れるのは、植栽、花、ベンチ、遊戯施設、便益施設といった個別の公園施設であり、それらが設置意義に応じて適正に計画・設計されていることが重要である。そうした良質な設計の実現への配慮が必要であるが、海外の代表公園などでは公園施設の個別デザインへの配慮が窺えた。それらの事例から、公園施設のデザイン手法として次の9つのデザイン手法を抽出することができた。ただし、これらはあくまで本資料で掲載した国内外の事例から導いたものであり、これら以外にも実際には個別のデザイン手法が存在することが考えられる。しかしながら、調査対象とした各事例は、想定される公園タイプごとに網羅的に選定されたものであるため、基本的なデザイン手法は踏まえられているものと考えられる。

- ①自然特性活用デザイン、②地域自然環境活用デザイン、③都市の自然環境保全デザイン、④都市のシンボル形成デザイン、⑤歴史的環境保全デザイン、⑥場の記憶保全デザイン、⑦都市の安全性確保デザイン、⑧鎮魂空間形成デザイン、⑨花活用デザイン

なお、本要件については、個別のデザイン手法に応じた留意点が存在するため、上記に示した9つのデザイン手法ごとに以下に留意点を取りまとめた。

① 自然特性保全活用デザイン

本デザイン手法は、公園敷地内に残る自然環境を、なるべく人の手を入れずにそのまま活用するデザイン手法を指す。自然公園のような大規模な自然環境が残る公園緑地に有効な手法である。本デザイン手法については、以下の事例が参考となる。

[デザイン事例]

スタンレーパーク（バンクーバー市、カナダ）タイプI（広大な自然体験型公園）

本公園は、三方を海に囲まれた丸い形状の半島がまるまる公園になっているものであり、園内は原生樹林に覆われている。このため、こうした原生自然には極力人の関与をしない設計になっ

ている。起伏のある内陸部には園路は極力設けず、地形の改変に影響のない計画になっている。メインの園路は海岸線沿いに設けられた公園の遊歩道（シーウォール）であり、汀線沿いの園路のため、大量の土砂の移動を伴う造成が必要なくなるとともに、利用者にとっても平坦な園路を利用できるというメリットがある。公園利用者のうちのおよそ9割が、このシーウォールを利用している。

海の中道海浜公園（福岡市）タイプⅠ（広大な自然体験型公園）

玄界灘の海岸線には手を付けず、人工林である松林は、園内の暴風のために不可欠であり、白砂青林の重要な要素でもあるため、その保全が図られている。

また、本砂州には雨水が溜まるため、園内の池の殆ど

は素掘りによって整備した池で、池の水位は地下水位そのものである。

このため、季節によって水位が変動するため、護岸は階段状にデザインされている。

園内で整備が進む「森の池エリア」に至っては、前記の

素掘り

の池と同じ理由で、降雨が続くと標高が低い箇所に現れる幻の池をそのまま公園施設として活用している。この幻想的な空間を、癒しの空間としてしつらえるため、自然地にはほとんど手を加えず、人の入る空間を限ったデザインが採られている。



② 地域自然環境活用デザイン

前記で掲げた「自然特性保全活用デザイン」は、園内に残る原生自然をそのまま保全・活用する手法であるが、本デザイン手法は、公園をとりまく地域固有の自然環境をデザインするものである。例えば、その場が熱帯地方であれば、地域に生息する熱帯性ランを集めて公園内で栽培するなどといった手法である。

〔デザイン事例〕

海洋博公園（国営沖縄記念公園海洋博地区、沖縄県本部町）タイプⅦ（テーマ特化型公園）

本公園で最も人気のある沖縄美ら海水族館において、展示してある魚類やサンゴ類などの海洋

生物は、基本的には
沖縄の海に生息す
る生物たちばかり
であり、展示テーマ
も沖縄の海（黒潮）
に沿ったものとな
っている。東京など



の水族館では世界中の珍しい魚類等を集めていることが
多いことと比べると、かなり明確なスタンスを持った展
示と言える。

このように、沖縄という地域に限った展示をしている
ため、海水は目の前の海から生海水（温度調整はせず）
を大量に水槽に引き入れている。また、水族館の建築物
は4階建てになっており、入口は4階部分に設けられて
いるが、各階の上の方ほど海の浅いところに生息する魚類が展示されている。このため、階を降
りるにしたがって、より深いところに生息する大型の魚類に遭遇することになるといった演出デ
ザインが図られている。



なお、本施設は単体でも十分に集客できる施設であり、利用客の中には、公園に隣接して水族館があると認識している者がいるほどである。本水族館は、開館当時は世界一の規模で、かつ複数のジンベエザメやマンタの飼育が人気の理由であり、こうした観光上誘客力のある施設を整備することによって、観光客の増加を図ることは手法として十分にありうることである。しかしながら、本水族館の人気魚類であるジンベエザメやマンタは、海洋博覧会から続いた前水族館での地道な飼育実績が実を結んだものであり、公園の施設として魅力ある施設の実現は一朝一夕には難しいものとする。安易に誘客機能を有する施設を公園内に誘致するという方法も考えられるが、その場合は、公園のテーマや理念との整合性が図られる必要がある。

③ 都市の自然環境保全デザイン

本デザイン手法は、既成市街地等の主に都市中心地において、都市計画上の観点から、都市のオアシスとしての緑化オープンスペースを創出するデザインを指す。ある意味、最も都市公園らしいデザインとも言える。

[デザイン事例]

セントラルパーク（ニューヨーク市、アメリカ）タイプⅡ（広大な都市のオアシス）

都市のスプロール化防止のために人工的に整備された公園のため、広大な芝生広場や牧草場が

広がるとともに、元からあった湖や沼なども巧みに活用している。

人工的に造られた公園にもかかわらず、公園のほとんどが自然に見えるのは、池の汀線などをより自然に近い地形にデザインし、かつ適切な植栽計画に



よるものである。また、道路は景観を崩さないために人工的に窪地に造られているなど、人工物が目に入らないような工夫もなされている。こうしたデザインによって、公園内はまるで天然自然の中にいるように錯覚する風景を現出し、都会的な景色や喧噪の中のオアシスとしての働きを果たしている。



新宿御苑（東京都）タイプⅡ（広大な都市のオアシス）

大都市の中の広大で静寂な自然環境が保たれている。大名屋敷の庭の遺構をデザインに組み込むなど、その土地の歴史を生かした設計がされている。現在の姿の原型は皇室の庭園として整備された際の形であり、イギリス式風景式庭園、フランス式整形式庭園、日本庭園という異なるデザインが巧みに



に組み合わせられた庭園を鑑賞することができる。設計者のアンリ・

マルチネは、ビスタラインを意識して庭園を造ったとされ、都市の過密化が進んだ現在、貴重な開放的なオープンスペースとなっている。また、園外の高層ビルと緑地の対比も魅力の1つとなっており、写真のように、その景観はニューヨークのセントラルパークに似ている。

生田緑地（神奈川県川崎市）タイプⅤ（施設複合型公園）

多摩川崖線上に位置する川崎市内最大の緑地である。公園のテーマは敷地内に残されている里山の自然や文化の保全であり、クヌギ・コナラを中心とした雑木林や、谷戸部の湿地や湧水等の里山的な環境が保全されている。それらに合わせるように、日本各地から古民家を移築・展示している日本民家園もある。里山の環境・文化の保全のため整備された公園緑地のため、森や自然をそのまま残すことが優先されている。このため、園路には、多数の登り坂や下り坂、階段、自然路などが点在しているほか、ゲンジボタルやホトケドジョウなどが生息する貴重な環境が保全されており、過去の環境を今に伝える場所になっている。

④ 都市のシンボル形成デザイン

本デザイン手法は、単に公園内のシンボルを作るということにとどまらず、都市のシンボルとなるべく、公園のシンボル性を際立たせたデザイン手法を指す。

〔デザイン事例〕

ミレニアムパーク（シカゴ市、アメリカ）タイプⅢ（都心の小規模なスポット）

ミレニアムパークを企画したブライアン市長は、ただの公園ではなく特別なものにしようという思いから、シカゴに古くからあったパブリックアートの伝統を活かして、ミレニアムパークを、芸術をテーマに整備することが望ましいと考えた。このため、世界的に著名な最高レベルの建築家や芸術家によるパビリオンや作品で公園を満たすことが目指された。



各パビリオンの整備は、寄付者（団体含む）にネーミングライト（施設名称決定権）が与えられたため、自らや自らが属する組織の名前が冠された施設であるならば、いっそ思い切った整備を行おうという動機につながり、その結果、各寄付組織の大胆な設計やデザインがなされ、どのパビリオンもシンボリックなものとなり、今では公園自体がシカゴ市の顔となっている。

ハイライン（ニューヨーク市、アメリカ）タイプⅣ（遊歩道公園）

公園化の動機は鉄道高架敷を保全することだったため、現状のハイライン（高架）の形状を、なるべくこのままの姿を維持した上で、最大限魅力を向上させることができる計画が指向された。それは、ハイラインをマンハッタンというアルプスのふもとに横たわる緑の谷に見立てて、適度な植栽を有する高質なデザイン案が採用された。

ちなみに、ハイラインが通るウェスト・チェルシー地区は、用途が軽工業地区だったところであり、もともと観光客が訪れるような場所ではなかった。また、ハイラインは鉄道廃線の高架であり、都市にとっては阻害要因でしかなかった。それを、



全く新しいタイプの公園として整備することによって地区にシンボルが誕生し、その影響で、公園周辺にアートギャラリー、美術館、ミュージカルやオペラが披露できる施設などが建てられるようになり、アートと一体となった空間が形成された。今では、ハイラインは古いチェルシー地区のシンボルとなっており、チェルシー地区に緑をもたらしたグリーンインフラでもあると評価されている。

通常は、公共事業であれば標準設計があり、また、安全上の理由から各種の施設には守るべき基準が設けられているため、実施設計段階において、こうした各種の規定の順守と理想とする公園の姿の実現の間に軋轢が生じた。例えば、フェンスは必要な高さが2.4mであったが、これではせつかくの視界を遮ってしまうため、植栽エリアを設けて人が入り込めないようにすることでフェンスの高さの特例が認められた。また、公園の予算軽減の観点から、標準仕様に基づくベンチなどが求められたが、個別に丁寧にその必要性を説明してクオリティの高いベンチが設置されていったなど、実施設計段階でのこのような細部のこだわりが公園の魅力を向上させていった。



サウス・バンク・パークランズ（ブリスベン市、オーストラリア）タイプV（施設複合型公園）

ブリスベン川南岸は、洪水の影響で荒廃した地区となっていたが、博覧会を契機に博覧会跡地を公園化したのが当公園である。本公園で最もシンボリックな施設は、公園のほぼ中央に設けられた人工ビーチ（ストリートビーチ）であり、モートンベイ沿岸から運ばれた白砂が敷き詰められた内陸の人工ビーチである。ここは周りをブーゲンビリアなどの南国の植物や花木で修景することによって、リゾート地の雰囲気醸し出しており、公園の雰囲気を象徴する施設でもある。本施設をはじめとした公園内の施設は、ブリスベン川の湖岸のという自然条件を活かした緑豊かなデザインが特徴であり、素晴らしい川の景色を堪能しながら、リラックスしてくつろぐのに最適な市民のオアシスを形成し、ブリスベン市民の最高のライフスタイルを実現する場となっている。

本公園の登場によって、今やサウス・バンク地区には、芸術や音楽などの学校も多く張り付き、文化をリードする地区となっている。また、世界的に一流でスタイリッシュなレストランやバーがサウス・バンク・パークランズの景観と一体となって隣接し、広々とした河岸環境を作り出している。

オアシス 21（久屋大通公園）（名古屋市）タイプIV（遊歩道公園）

名古屋のオフィス街で、かつショッピング街である栄町の中心軸をなすのが久屋大通公園であり、大通公園の顔としてふさわしく、賑わいあふれる拠点性を確保するため、オアシス 21は、久屋



大通公園の中でもより一層ランドマークとなるべきデザイン性の高い建造物が目指された。建造物のデザインは、宇宙船をイメージしたもので、水をたたえたガラスの大屋根がシンボリックな

構造物となっている。この大屋根と芝生広場（緑の大地）とイベント広場（銀河の広場）、加えてバスターミナルや地下街のショップが一体となった立体型の公園となっており、町のシンボルの施設となっている。

国営ひたち海浜公園（茨城県ひたちなか市）タイプV（施設複合型公園）

広大な敷地に四季折々の花がダイナミックに咲き誇る風景で有名である。「みはらしの丘」一帯を覆うネモフィラやコキアは、毎年テレビなどでも紹介され、多くのファンを呼びこんでいる。これは、単一の樹種の花によって広大な丘を埋め尽くすという大胆なデザインが採用された例であり、右写真のように見る者を圧倒する。素人でも見栄えのする写真撮影が可能ほどの被写体であるため、SNS上で人気が高く、今やネモフィラやコキアの同様の修景は、全国の他の大規模公園でも採用されている。



⑤ 歴史的環境保全デザイン

本デザイン手法は、歴史的な遺跡や庭園などを往時の姿で景観維持がなされる手法を指す。歴史公園の場合は、ほぼ本手法が採られているが、歴史景観の忠実な保全・再現がどこまで忠実になされるかがポイントとなる。

リュクサンブール公園（パリ、フランス）タイプVI（歴史的公園）

17世紀に建造されたブルボン王朝ゆかりの宮殿や庭園をそのまま保存し活用されている。往時の施設として、養蜂園、ポニー乗馬場、オランジェリー〔冬季の園芸種の保存施設〕、温室などが配されており、観光客は、王朝文化に触れるために公園を訪れている。中でも、当公園で特筆すべきことは、画家のドラクロワ、ジョルジュ・サンド、ショパンなどの著名な作家の作品ばかりの彫像が、約100体も展示されていることである。



兼六園（石川県金沢市）タイプVI（歴史的公園）

「廻遊式」の要素を取り入れながら、様々な時代の庭園手法をも駆使して総合的につくられた大名庭園であり、「築山・林泉・廻遊式庭園」とも呼ばれる。歴代加賀藩主によって築庭されてきた状況をそのままに



保全している。観光客がよく写真を撮影する場所として琴柱灯籠や、サイフォン式の噴水などが挙げられる。現在は特別名勝であるため、

昔からの風景を大切に維持・管理が行われており、看板等の設置は控え気味するなどの工夫がされている。結果として江戸時代の風景が、高いクオリティで保全されている。

奈良公園（奈良市）タイプVI（歴史的公園）

東大寺、興福寺、春日大社、国立博物館、正倉院等と一体になった公園であり、奈良時代の風景が偲ばれるデザインとなっている。このため、社寺の歴史的風致景観を守ることが大前提と



なっており、風致地区にも指定されている。公園の歴史景観維持のため、案内看板等の設置やイベントの開催内容については、公園の歴史的雰囲気と合致するよう控えめなものになっている。

⑥ 場の記憶保全デザイン

前述した歴史的環境保全デザインは、歴史的遺産や環境を持続的に維持保全するデザイン手法であるのに対して、本デザインは、その場にあった何らかの歴史的記憶を、象徴的な事象を用いて利用者の記憶に留めるための手法である。

〔デザイン事例〕

ハイライン（ニューヨーク市、アメリカ）タイプIV（遊歩道公園）

本公園は鉄道高架の廃線敷をそのまま遊歩道公園として整備した事例である。本公園は、高架上という限られた空間の



中で、所要の園路や植栽帯を確保して整備されている。このため、当然ながら鉄道の名残であるレールは基本的には取り外されている。しかしながら、廃線敷であったという記憶を残すために、一部のレールは植栽帯の中に残されている。

⑦ 都市の安全性確保デザイン

本デザイン手法は、公園やその周辺の防犯の観点からの安全性確保を目指した手法である。

[デザイン事例]

警固公園（福岡市）タイプⅢ（都心の小規模なスポット）

公園の老朽化や植物の経年変化に伴って治安の悪化が問題となったため、「防犯と景観の両立」というデザインコンセプトのもとに公園施設の再整備が行われた事例である。防犯の観点



から見通しを改善するために、公園西側の築山の撤去や樹木の伐採が行われた。また、人の視線の死角を無くすために、公園内とその周辺の歩道を広くして、ベンチや花壇を配置した。その結果、公園の内外から園内の様子や来園者の様子が眺められようになり、防犯性が向上した。また、同時に園内からは周囲の都市景観を楽しめるようになった。さらに、スケートボードの利用を排除するために、舗装を芝や自然石を用いるなどに変更された。また、隣接する施設（神社等）からの人通りを円滑にするために園路計画を見直すとともに、交番を誘致するために、公園の一部を公園区域から除外するといった思い切った方法も採用された。

⑧ 鎮魂空間形成デザイン

本デザイン手法は、墓園や慰霊塔などにおいて、鎮魂するための空間の静謐な雰囲気を出し出すためのデザイン手法を指す。

[デザイン事例]

広島平和記念公園（広島市）タイプⅦ（テーマ特化型公園）

本公園は爆心地である旧太田川（本川）が元安川と分岐する三角州の最上流部に位置している。原爆被害者の慰霊と世界恒久平和を祈念して開設されたため、原爆被災地の悲惨さを記憶にとど

めて恒久的な平和を祈念する場となるように、メッセージが分かりやすくかつ静謐な雰囲気の醸成が図られた。

具体的なデザインとしては、人通りの多い平和大通



りから原爆ドームに向かう景観軸を定め、その軸線上に慰霊碑を配置し、後方に広島平和記念資料館が配置されている。資料館は解説機能として不可欠であるが、本資料館が平和大通りから原爆ドームへの公園利用者の視線を遮らないよう、建築物はピロティによって空中に浮かせる形となっている。

⑨ 花活用デザイン

公園緑地には必ずと言っていいほど花木や草花（紅葉する樹木等を含む）が植えられる。単に添景物として植栽される場合も多いが、花自体を集客のための重要な公園要素として植えられることも多く、また植え方にも工夫が凝らされる。

また、植物のデザインで重要なことは、それが生きている素材だということである。すなわち、健全に生育されなければならないので、農学的見地に基づいた植栽環境の整備も必要となってくる。例えば、国営ひたち海浜公園の見晴らしの丘は建設残土が盛られた丘であり、あしかがフラワーパークは低湿地だったところだが、双方ともに植物の生育を考慮した客土や土壌改良がなされている。

〔デザイン事例〕

新宿御苑（東京都）タイプⅡ（広大な都市のオアシス）

広大な園内には1万本を超える樹木が植栽されており、都心における貴重な緑地となっている。また、特に園内には約65種1000本のサクラが配植されており、一年を通じてサクラの花を觀賞することができる大きな魅力になっている。早春には早咲きのサクラが咲き、4月初旬にはソメイヨシノが、その後はサトザクラが花を咲かせる。カンザクラは冬に咲くが、夏や秋に狂い咲きすることもあるためである。長期間にわたってサクラの花見を楽しむことができるばかりでなく、他にも四季を通して様々な花が鑑賞できる。また、明治天皇誕生日の10月には、様々な菊の園芸品種の展示もなされる。



国営ひたち海浜公園（茨城県ひたちなか市）タイプV（施設複合型公園）

広大な敷地に四季折々の花がダイナミックに咲き誇る風景で有名である。四季を通じて色鮮やかな花々を雄大なスケールで見せる演出は、公園関係者の間でも注目を集め、見学に訪れる専門家も少なくない。茨城県での観光を考えると、偕楽園の梅の見ごろが終わった後も、四季を通じて花々を楽しむことができるようになっている。3月のスイセンから始まり菜の花やチューリップ、そして5月になると「みはらしの丘」一帯を覆うネモフィラは、毎年テレビなどでも紹介され、多くのファンを呼びこんでいる。夏にはバラやラベンダーが、秋になればこの公園で品種改良されたコキアの群れが鮮やかな紅葉で目を楽しませる。ひたち海浜公園がこうした花作りに注力してきたのは、茨城県を代表する公園にふさわしい個性と、地域に貢献できる集客力を目指すという目標が背景にあった。そこで県や地元の声を踏まえて、春から秋まで途切れなく楽しめる花と緑の組み合わせを選び、育てることで、現在のような姿が形成されていった。



足利フラワーパーク（群馬県足利市）タイプVII（テーマ特化型公園）

天然記念物に指定された大藤の名木をはじめとして、四季折々の花々が鑑賞できる。最大の売りである大藤の生育に適した水辺の環境が整備されている。ビューポイントの設定、見える角度、風景が映える演出づくりにも配慮され、特に、ビジュアルは常に変化をつけるように工夫され、毎年同じものにならないよう、また、シーズン毎にも季節の変化や花毎の変化をつけるようにされている。こうした景観創出の努力によってリピーターを生んでいる。



また、本フラワーパークで最も特徴的なことは、開花状況によって入園料金に差が設けられており、花の見頃に最も高い料金設定がなされていることである。

要件4 公園の実現手法

要件1～3は、どれも広い意味での計画・設計に係る要件である。しかしながら、いくら立派な絵が描かれたとしても、その絵を実現するための手立て（手法）を現実的かつ具体的に講じなければ、魅力のある公園の実現は難しい。

事業費の確保

その手立て（手法）とは、最も分かりやすいのは事業費（予算）の確保である。予算が潤沢にあれば、どのような計画であっても、物理的に不可能ではなくかつ違法物件でないかぎり整備は可能である。しかしながら、実際には限られた予算の中でのやりくりとなり、その制約の中で実現を図らなければならないので、事業費の確保といった現実的手段は重要である。公共事業の場合は、関連法規（制度）を熟知したうえで、所要の予算化を図り、関係機関や利害関係者と調整して実現していくことになる。単に標準的なレベルの公園であれば、淡々とこうした手続きを進めていけばいいが、観光振興に資するような誘客効果の高い公園の実現には、多様な行政制度を活用するなどのさらに工夫が求められる。

国家的プロジェクトや地域の顔となるような公園であれば、所要の予算が確保される場合もあるが、昨今はなかなか予算面では厳しいものが予想される。事業の意義や必要性を説いて所要の予算を確保するのが王道であるが、それが難しい場合には、必要に応じて民活手法の導入なども視野に入れる必要がある。

民間手法の活用

昨今、Park-PFI 事業に代表される公園緑地での民活事業が推進されているが、その目的の一つに、事業費の多様化を図るという意味合いがある。また、民活手法は、単に予算の多様化を図るのみならず、施設にデザインを含めた民間のノウハウを取り入れやすいという意義もある。我が国では都市公園法の改正によって Park-PFI 制度が位置付けられ、今や全国各地で民間の運営による公園施設が生まれており、集客性の高い高質な施設の成功事例も見受けられる。しかしながら、民活が成立する公園は限られ、収益が見込まれる収益事業も限られる。このため、安易に民活に走るべきではない。まずは、民間ノウハウの導入が不可欠な事業であったり、有効な収益事業が見込まれるケースかといったことを見極めることが肝要である。

ミレニアムパークは、寄付金によって必要な整備費を確保した最たる事例であるが、米国であっても、通常の公共事業では予算上の制約があり、なかなか思い切ったことができない。このため、地面より上部の公園空間については、全て民間の寄付金でまかなうという方針がとられたことで巨額の資金を投入することができ、結果的に高質なデザイン性の高い空間がシカゴ市の中心に登場することになった。シカゴ市がこれだけの寄付を集められたのは、日本とは異なる社会的

背景の違いや時期的に幸運だったことも挙げられるが、ネーミングライトの制度を用いたり、寄付者の名前をモニュメントに刻んで残すといたつきめ細かい手立てが講じられたことが功を奏したとされる。

また、デザインの選定方法の面では、ハイラインは、ニューヨーク市からの委託によってNPO フレンズ・オブ・ハイラインが公園計画のコンペを行った。これは、競争性のある選定方式（コンペ方式等）により、高質なデザインの採用が可能になった事例である。その結果、36 か国から720にも及ぶ作品が寄せられ、その中から、ハイラインをマンハッタンというアルプスのふもとに横たわる緑の谷に見立てた高質なデザイン案が採用された。

名古屋のオフィス街でかつショッピング街である栄の町の中心軸をなす久屋大通公園の中で、さらに都市のランドマークとなるべきデザイン性の高い建造物が求められたのがオアシス21だった。本施設計画は提案競技によって、宇宙船をイメージしたガラスの大屋根が水をたたえた案が選ばれた。このように、民活手法の活用は、事業目的の実現のための一つの選択肢となりうる。

関係者間の調整

どのような事業でも大なり小なり関係者間の調整は必要となってくる。また、単体の公園のみならず、周辺の市街地との連携を図る意味からも関係者間の調整は重要である。福岡市の警固公園は、治安の悪化という問題を解決するために、地域住民や周辺の事業者、エリアマネジメント団体、ボランティア団体、大学、福岡県警察が連携し「警固公園対策会議」が発足し、ここで検討が進められた。様々なステークホルダー等の関係者の調整に基づいて実現した最たる事例である。賑わい創出を求める民間企業と、静かな環境を求める地域住民の間の葛藤もあったようであるが、活発な議論から双方が合意する警固公園の姿が導き出されていった。警固公園の事例ほどは関係者が多様なことはあまり多くはないと考えられるが、調整すべき関係者の対象を的確に選定していく必要がある。

リーディングプロジェクトの導入

リーディングプロジェクトとは、国家的プロジェクト等の先行的プロジェクトや国際的イベントなどを指し、これらの事業に応じる形で公園整備を図るという手法である。適したリーディングプロジェクトが見いだせる場合には有効な手段である。例えば、サウス・バンク・パークランズは、荒廃していたサウス・バンク地区の再活性化のために開催されたブリスベン国際博覧会を契機に会場跡地が公園化されたものだった。その意味において、我が国においては、大阪府にある日本万国博覧会記念公園や大阪市内にある花博記念公園鶴見緑地、それに沖縄県にある海洋博公園と位置付けは似ている。博覧会はイベントというよりも一つの巨大なプロジェクトであり、その意味ではリーディングプロジェクトの導入によって公園目的を実現させたと理解できる。

また、ときわ公園は、UBE ビエンナーレという国際彫刻コンクールの開催によって、園内の彫刻というハードの充実と、集客を同時に実現させた事例であり、上記の博覧会関連事例と共通するところがある。

以上のように、先進事例では、公園自体の実現のためや公園の機能アップのために、様々な事業手法を駆使していることが分かる。それらの手法は、以上のように事業費の確保、民間手法の活用、関係者間の調整、リーディングプロジェクトの導入などにまとめることが可能である。

要件5 周辺とのネットワーク形成

本要件は、公園を取り巻く市街地や、観光周遊上の観点からの公園の魅力向上のための要件である。公園の魅力を決めるものは、単に公園敷地内の内容にとどまらず、その周辺状況によるところが大きい。それらは、公園へのアクセスのための公共交通機関の充実や、他の観光施設との観光周遊が図られること、また、周辺市街地との一体的な景観対策などが挙げられる。

交通アクセス性

海外事例ではほとんどの公園はアクセスが容易であり、国内事例もおおむねアクセス性は良好であった。もちろん、海洋博公園や新倉山浅間公園のように、アクセスの利便性が高いとまでは言いづらい事例もあるものの、アクセス性が悪いとまでは言えない。アクセス性の良し悪しは集客に大きく影響するため、立地条件（公園アクセス性）は、重要な要件の一つと言える。

アクセス性に優れない公園の魅力を高めるためには、交通手段の充実等の措置を講じる必要がある。特に、我が国への海外観光客の声として、単に交通インフラが整っていても、外国人には路線バスはほとんど乗りこなせないといった意見があるので、利用者への適切なアクセス情報提供手段も含めたアクセス性の向上策が必要である。

観光ネットワークの形成

観光の振興を図るには、単体としての公園のみで観光客の誘致を図るよりも、他の観光施設との周遊が図られたほうが望ましい。当該公園が際立って集客力がある場合には、本公園を中心に観光周遊ルートが形成されるが、集客力がそれほどでもない場合や、さらに集客を図る場合には、周遊上のネットワーク構築は有効である。具体的な策としては、団体ツアー客は、民間のツアー会社のコースに基づいて来訪するので、民間ツアー会社のコース上に公園が位置付けられる必要がある。そのためには、公園自体の魅力が伴うことが最も望ましいが、ツアー会社への観光手数料の支払いが可能なシステムの採用は有効である。また、個人客の場合は、他の観光施設とのセット券の販売など、周遊が図られやすい措置を図ることが望ましい。また、レンタカーやタクシー利用客の場合も、料金と入園料の割引等が一体になったタイアップが図られることが望ましい。

ちなみに、海外事例では、セントラルパークにおける周辺の博物館との情報共有程度しか具体の対策は見られなかったが、一方で、国内事例では、他観光施設等とのネットワーク形成のための努力がはらわれていた。観光行政にかかることはなかなか公園部局だけでは難しいが、観光部局や民間とのタイアップによって、その実現を図ることが望ましい。

周辺市街地との連携

公園緑地は都市の中の貴重な自然環境あふれるオープンスペースであるが、特に歴史公園などは、周辺の歴史的町並みと一体的な景観を形成することによって、観光上の魅力向上が図られることがある。国内の事例では、兼六園周辺の地区は、金沢市の景観条例によって眺望景観形成区域 兼六園眺望台区域に指定されており、周辺の建築物・広告物・設備に対して保全方針が定められている。また、沖縄の首里城公園は、首里城復元を契機に、周辺の街並みの景観意識が向上し、今では景観法に基づく那覇市景観計画が定められている。同計画では、首里金城地区都市景観形成地区が位置付けられ、首里城周辺の竜潭通り沿いの民間建築物は、首里城のモチーフ（赤瓦）を活用した意匠がデザインされている。このように、周辺市街地と一体的な景観形成に係る制度には多様な制度があるので、既存制度を活用した検討も必要である。



歴史公園に限らず、景観上の観点から都市の中における当該公園の位置づけは重要である。海外事例では、ハイラインの高架の下の土地は、鉄道とは関係の無い第三者の土地所有であったが、ハイラインの高架が撤去されれば、そこに建物を建てることができ、これらの土地所有者は莫大な利益が得られることになる。このため、これらの土地所有者の権利を守るために、開発権の移転が行われた。それは、ハイラインの上空の使えない開発権を近隣の他の街区の建物に移して売却するというものであった。本措置によって、ハイラインの通るチェルシー歴史地区は、引き続き建物の高さを低く抑えることが可能となり、地区の景観保全につながった。

景観上の周辺都市と公園の関係は、大きく、公園内の雰囲気に合わせて周辺市街地の景観整備、公園からの眺望を阻害しない周辺市街地の在り方（規制）、公園の存在による周辺市街地の住環境向上の三つに分類できる。セントラルパークの場合は、公園の存在によって周辺の住宅の価値が担保されている。以上のように、公園をその周辺地区と一体の施設として景観上の一体性を確保することが望ましい。

なお、都市の景観以外にも、公園とその周辺地域との連携は、エリアマネジメントに代表される地域全体での取り組みの一員としての連携も重要である。特に、公園はイベントをはじめとした地域連携の各種事業を実施する場として重要である。また、ニューヨークのハイラインのように、公園を核として地区全体が観光上一体的なイメージ形成が図られている場合には、地区全体での観光アピールの共同事業の実施につながる取り組みが求められる。

要件6 ソフトサービス

公園の観光上の魅力を向上させるには、ハードのみならず、適切な公園利用者や観光客へのソフトサービスの充実が、公園利用者や観光客の満足度を高めることにつながる。これは日本人が得意な「おもてなし」に通じるものであり、確実に集客や利用者の満足度向上につながる事項なので、重要な要件と考える。

ソフトサービスには、公園利用者や観光客への適切な情報提供や、園内での案内といった利用者案内が挙げられる。利用者への提供すべき情報は、大きく、公園を訪れるまでの事前情報の提供と、公園を訪れてから提供する情報とに分けられる。最近ではHPによる情報提供が利用者にとってが入手しやすいため、国内外ともにHPは充実してきている。また、主に国内事例では、園内での案内にICT技術を用いたサービスが提供されている。

イベントはソフトサービスとして集客に効果的なので、海外事例、国内事例ともによく開催されている。

利用者案内

従来から行われているサービスであるが、最近ではインターネットの発達によって、事前にHPにて情報が調べられるため、その適切な情報をタイムリーに影響することは重要である。特に、あしかがフラワーパークは、その日の花の咲き具合をタイムリーにHP上で情報提供しているが、まさにこうした情報提供こそが求められている。

また、SNSの発達によって、利用者の口コミが瞬時に広まってしまう昨今において、常に満足が得られる状態を備えておくことこそが重要である。

ICT 関連サービス

国内事例調査からは、最先端のICTデバイスを用いた利用者サービスも実施されている。これらは、基本的には、フリーWi-Fiのサービスと音声翻訳機の導入、案内音声アプリの開発に整理できる。これらのように、昨今は、インターネット環境の整備等のICT技術に関するサービスも提供されているのが特徴である。また、こうした技術は日進月歩のため、今後さらに便利なツールの開発も期待できる。利用者満足度の向上と、公園管理の省力化のためにも、積極的に導入を図るべきと考えられる。こうしたデバイスは、初期投資は必要だが、人件費の削減につながり、また、利用者にとっても利便性が良くなるので、必要なものという認識が必要である。

なお、ICT技術では、翻訳機のように多言語対応のために用いられている例が多い。また、国内事例では、ICT技術に限らず、海外旅行者のための多言語による利用者案内への取り組み努力がなされている。これは、我が国では言葉の壁が利用者案内上の課題になっているためであろう。その点、海外の公園、それも英語圏の場合には、海外旅行者が英語を話せばいいため、あまり言

語については課題意識がないのであろう。

イベント

公園にはイベント目的の来訪者も多いし、イベントによって来訪者の満足度が向上するため、積極的なイベントの開催が望ましい。なお、イベントは主催者が実施する主催者イベントと、第三者が実施する持ち込みイベントがあるが、理想的には集客力の高い持ち込みイベントの開催が望ましい。そうした持ち込みイベントが参入しやすい環境（ハード、ソフトとも）の充実を図ることが望まれる。

海外の公園事例では、実に多くのイベントが開催されていることが窺える。また、国内事例についても、それぞれの公園内容に沿ったイベントが開催されている。例えば、国営ひたち海浜公園のロックフェスティバルは、春のネモフィラ、秋のコキアと並んで、公園の大きな集客源となっている。ときわ公園は、彫刻の国際コンクール「UBE ビエンナーレ」が、インバウンドも含めた誘客に繋がっている。奈良公園は、公園管理者ではなく、隣接する寺社が開催する有名なイベント（東大寺修二会〔お水取り〕、なら燈花会、正倉院展、春日若宮おん祭）があるため、それが誘客に貢献している。

要件7 公園利用によって醸成された魅力

本要件は、公園の計画手順を踏んで導き出せるものではない。むしろ、その手順を踏んでも気づかれなかった魅力が存在する可能性があるということを意味する。また、本要件が適用できるケースは、既存の供用公園が対象となることが想定される。つまり、本要件を踏まえるとすれば、利用状態が捗々しくない公園のリニューアル計画を立案する場合に考慮すべき要件であると考えられる。

本要件が最も合致する事例は新倉山浅間公園である。その魅力がインバウンド客によって知られ、それがSNSで世界に広がり、人気に伴って国内観光客も訪れるようになった事例である。本公園で有名な五重塔は、本来は第二次世界大戦犠牲者の忠霊塔として造られたものであり、五重塔をモチーフにしているものの、鉄筋コンクリート製の建造物である。あくまで戦争犠牲者の鎮魂が目的で整備されたものであるが、五重塔という日本らしい



意匠の建造物であり、それが富士山やサクラと同時に一枚の写真に収めることができるため、外国人にSNS上で人気が出て、多くの外国人観光客が訪れる人気のスポットとなったという経緯がある。その意味では、忠霊塔整備の段階では想定していなかったインバウンド利用が生じ、ひいては国内観光客の集客にも寄与したということであり、利用者によってその魅力が発見・醸成されたという事例である。社会情勢の変化に伴って、公園の使われ方も変遷していくので、長い時間の経過があれば、当然ながら計画時点で想定しなかった使われ方がなされることはありうることである。そして、それが結果的に集客につながるのであれば、観光振興には寄与することになる。

本事例は、利用者によって公園の魅力が発掘されることではあるが、意図的にそうした潜在的な魅力を発見することによって、魅力の向上につなげていくことが考えられる。それらの留意点には以下のものが挙げられる。

公園の利用状況の把握

公園がどのように利用されているかを把握し、隠れたニーズを探し出す必要がある。その場合に、管理者が意図しない使われ方が見られた場合には、注意して観察したり、利用者へのヒアリングを行う必要がある。ただし、隠れたニーズはなかなか顕在化しないので、社会実験等の実施によって見出すことも必要である。特に、供用中の公園であれば、社会実験的に様々な公園の使われ方を試してみることもありうる。そして、公園利用者の反応に応じた公園のリニューアル計画を検討することが必要である。

既存の公園計画の取り扱い

一旦計画が立案されると、その変更は容易ではないが、公園の利用が十分に図られていない場合には、先入観を持たずに、また、既存の公園の基本計画にとらわれず、計画を白紙状態にみなして、虚心坦懐に公園のあるべき公園の姿を見出す必要がある。